

研究開発完了報告書

文部科学省初等中等教育局長 殿

住所 山形県米沢市門東町1丁目1-72
管理機関名 学校法人 九里学園
代表者名 九里 廣志

令和元年度地域との協働による高等学校教育改革推進事業に係る研究開発完了報告書を、下記により提出します。

記

1 事業の実施期間

令和元年 5月16日(契約締結日)～令和2年 3月31日

2 指定校名・類型

学校名 九里学園高等学校

学校長名 九里 廣志

類型 グローカル型

3 研究開発名

世界に誇れる持続可能な置賜を創造する人材の育成

4 研究開発概要

3 学年合同の学年縦断型で SDG s の理念を学習しつつ、「貧困」「食糧問題」「多文化共生」「難民・移民」を中心としたグローバルな課題についての課題解決型の学習を JICA や大学と連携して行う「グローバル α 」と、地域の社会的課題の解決を自治体や企業、留学生との協力でフィールドワークに取り組みながらプロジェクト学習や個人の課題研究について、ゼミ形式を用いて行う「グローバル β 」を開発する。このグローバル α ・ β でのテーマに沿ったフィールドワークに取り組むハワイ研修を2年次に行い、また、年度末には1・2年生が参加し、グローバルでの探究学習の成果を発表し合い、SDG s をテーマとした意見交換まで行う台湾でのグローバル・サミットを行い、海外での知見を活かしてグローバルな視点から考察を深められるように計画する。そうすることで、グローバルな視点とローカルな視点を持ち合わせつつ、 α と β が同時双方向的な応用を実現し、螺旋構造的に学びが機能するよう計画する。さらには台湾やフィリピンの姉妹校との相互交流やNGOと連携したフィリピン短期研修などに生徒を参加させ、相対的に日本の課題等について理解促進するよう計画する。

また、留学生との協働学習キャンプや海外研修やサミットにより、実践的英語運用能力の向上を図る。そして、最終的にはコンソーシアムとしてシンポジウムを開催し、持続可能な社会構築へ向けて提言を行う。

また、留学生との協働学習キャンプや海外研修やサミットにより、実践的英語運用能力の向上を図る。そして、最終的にはコンソーシアムとしてシンポジウムを開催し、持続可能な社会構築へ向けて提言を行う。

5 教育課程の特例の活用の有無
なし

6 管理機関の取組・支援実績

(1) 実施日程

業務項目	実施日程											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
コンソーシアム	○		○	○		○	○	○	○	○	○	
海外交流アドバイザー		○	○	○		○	○	○			×	×
地域共同学習実施支援員	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
研究開発推進委員会動								○	○	○	○	○
運営指導委員会							○		○		○	

(2) 実績の説明

①コンソーシアムの構成団体

各構成団体との事業認識を形成するため本校校長を中心に協議を重ねた。しかし個別の協議となつてしまったため、令和2年度はコンソーシアムの全体会を計画している。

機関名	機関の代表者名
株式会社キムラ	社長 木村亮
NPO 法人 ゆあら	代表 竹部広子
上和田有機米生産組合	組合長 高橋稔
米沢栄養大学	学長 鈴木道子
置賜定住自立圏共生ビジョン懇談会	会長 尾形健明 (山形県立産業技術短期大学 校長)
学校法人新庄学園新庄東高等学校	校長 田宮邦彦

(2) 海外交流アドバイザー

①指定した人材・雇用形態・高等学校における位置付けについて

米沢国際交流協会理事 宗友かおり氏

海外交流アドバイザー (非常勤として雇用) 週3回学校で勤務

②活動日程・活動内容

活動日程	活動内容
令和元年度5月～	毎週水曜日に行われる地域推進研究推進委員会会議に出席。海外との提携のみならず、本校のプロジェクトに関して協議・提言を行う。
令和元年5月23日	フィリピン・カルロスLアルバート高校とのウェブ会議に参加
令和元年5月24日	米沢国際交流協会との協議を設定、進行。

令和元年 6 月 3 日	本校海外留学・研修プログラム説明会に出席、プログラム概要及び留学体験等について説明。
令和元年 6 月 24 日	多文化共生プロジェクト グローバルカフェでのワークショップに参加。全体をファシリテーション。
令和元年 7 月	フィリピン短期留学参加生徒への事前学習を実施（計 3 回）
令和元年 7 月 13・14 日	グローバルキャンプに参加。留学生と参加生徒のワークショップをサポート。
令和元年 9 月 24 日	米沢国際交流協会との協議を設定・進行
令和元年 10 月 21 日	本校のハワイ研修 FW 保護者説明会に出席 山形観光物産協会とのグローバルサミットの打ち合わせに出席
令和元年 10 月 31 日	台湾からの教育旅行視察団との交渉に出席。本校の交流プログラムについて説明
令和元年 11 月 2 日	高島オーガニックラボに出席
令和元年 11 月 27 日	フィリピン・カルロス L アルバート高校との姉妹校へ向けての協議に出席。連携プログラムについて協議。
令和 2 年 3 月	フィリピン・カルロス L アルバート高校との姉妹校提携調印式に出席予定であったが、新型コロナウイルスにより実施中止とした。

(3) 地域協働学習実施支援員について

①指定した人材・雇用形態・高等学校における位置付けについて

高島町地域創生プロデューサー 外菌明博氏（非常勤として雇用）

②実施日程・実施内容

日程	内容
令和元年 4 月 18 日	地域協働研究推進委員との打ち合わせ。令和元年度事業における活動計画及び内容について協議
令和元年 4 月 26 日	上和田有機米生産組合との協議を実施。フィールドワークの内容等について協議。
令和元年 4 月 27 日	グローバル基礎 食と健康プロジェクトキックオフ開催 菊池良一氏の講演と本プロジェクトの目的について講義
令和元年 5 月 16 日	上和田地区有機生産者である菊池良一氏の菊池農園でのフィールドワークを実施。全体をプロデュース。
令和元年 6 月 21 日	地域協働研究推進委員会プロジェクト会議に出席。全体のカリキュラムについて助言
令和元年 6 月 24 日	多文化共生プロジェクト振り返りに出席。今後の方針について助言
令和元年 7 月 1 日	米沢栄養大学加藤教授と打ち合わせ。今後の本校との連携について協議。
令和元年 7 月 11 日	菊池農園でのフィールドワークを実施。全体をプロデュース。
令和元年 7 月 16 日	米沢栄養大学での協議に出席。実証実験等、本校との連携の仕方について協議。
令和元年 7 月 24 日	オーガニックラボ開催に関する協議を開催。
令和元年 8 月 22 日	プログレスコース 1 年生へ探究学習の意義とこれまでの成果について講演。
令和元年 9 月 18 日	グローバル演習 探究学習中間報告に出席。生徒への指導に当たる。
令和元年 9 月 26 日	菊池農園でのフィールドワークを実施。全体をプロデュース。
令和元年 9 月 27 日	地域協働研究推進委員との打ち合わせ。前期総括と後期についての協議。

令和元年 10 月 18 日	地域協働研究推進委員との打ち合わせ。 進捗状況についての確認とハワイ研修の位置づけについて協議。
令和元年 10 月 24 日	令和元地域との協働による高等学校教育改革推進事業全国サミットに参加
令和元年 10 月 29 日	本校 1 学年へ、食と健康プロジェクトの概要及び成果、また、食と健康について講演
令和元年 11 月 2 日	オーガニックラボ開催。全体を総括しつつ、生徒の発表補助。 外菌氏が進行し、米沢栄養大学加藤教授、本校担当者、有機米生産者とのパネルディスカッションを行い、本校での成果を発信。
令和元年 12 月 19 日	グローバルラーニング「模擬国連」に出席
令和元年 1 月 24 日	上和田有機米生産組合との協議に出席。 高畠町商工観光課職員と次年度のプロジェクトについて協議。

(4) 運営指導委員会について

①運営指導委員会の構成員

氏名	所属・役職
スルトノフ・ミルゾサイド	東北公益文科大学 国際教養コース 教授
金光 秀子	米沢栄養大学 健康栄養学科 学科長
甲斐 伸好	拓殖大学 国際学部 学部長
森田 明彦	尚絅学院大学名誉教授 元国際連合開発計画プロジェクトマネジメントオフィサー
我妻 秀彰	米沢市役所 企画調整部長
本多 勝	日本国際協力機構 (JICA) 東北支部市民参加協力課長

②活動日程・活動内容

活動日程	活動内容
令和元年 10 月 23 日	拓殖大学甲斐教授への活動報告。
令和元年 12 月 19 日	拓殖大学甲斐先生が本校グローバルにおける模擬国連を視察。講評をいただく
令和 2 年 2 月 15 日	運営指導委員会開催

(5) 管理機関における取組について

①管理機関（コンソーシアム含む）における主体的な取組について

- 1) 学校法人九里学園では毎月、理事長・学校経営担当理事 3 名・事務長・事務会計担当・副校長（高校）・教頭（高校）・園長（幼稚園）による経営会議が行われている。
この会議で「地域との協働事業（グローバル型）」についての報告を行い、経営担当理事から事業運営についての示唆をいただいた。
また、年 3 回開催される、理事・評議員会では年度当初に「地域との協働事業（グローバル型）」についての事業計画を説明、法人からの予算措置（協働事業における所要経費の内の管理機関負担額）について了承を得た。
1 2 月 1 2 日開催の理事会では協働事業の中間報告をおこなった。
- 2) コンソーシアムを構成する組織と協働事業を進めていくために組織の長との会合を持った。
- 4) 今年度構成しているコンソーシアム以外の企業や組織に対して、事業に対する協賛の働きかけを行い寄付を募った。

②事業終了後の自走を見据えた取組について

- 1) 今年度構成しているコンソーシアム以外の企業や組織に対して、次年度以降、本校の事業に賛同する企業や組織の発掘を行っている。
- 2) 来年度については、本事業を中心的に担っているプログレス・コースの教員についての加配

学校の生徒は日程の調整がつかず参加ができなかった。

【グローバルβ】

1年次（基礎）に Project Based Learning (PBL)、2年次（演習）には、1年次のプロジェクトで見いだしたさらなる課題を個人での課題研究として行い、さらにハワイ研修にて持続可能な社会の創造についての調査も行う Personal Project Learning (PPL)、3年次（発展）にはそれを英語で発信する Personal Advanced Learning (PAL) に取り組んだ。

① PBL (1 学年)

今年度は特に、1年次のグローバル・ラーニングβにおける Project Based Learning に力を置き、そのプロジェクトを軸としたコンソーシアムでのカリキュラム作りを行った。プロジェクトは「食と健康」「子ども食堂」「多文化共生」の3つである。

「食と健康プロジェクト」

(高島町役場、有機農業組合、米沢栄養大学、NPO法人和楽茶の間と協働でのプロジェクト)

高島町が日本に誇る有機農家で和法薬膳研究所長、菊地良一氏の菊地農園へのフィールドワークを行い、土作りや農業体験、実食などを体験し、その価値や効果を理解し、世界に普及しつつ、地域課題の解決を目指す。

高島町地域創生プロデューサーからの講義及びワークショップや菊地氏の講演、3回にわたるフィールドワークなどを行い、五感で学ぶということ 키워ドに取組んだ。実際に土や食材に触り、和楽茶の間のスタッフの工夫を凝らした昔ながらの料理を実食し、有機農業の価値や食の大切さを実感した。また、菊地農園の食材の効果を測定するために米沢栄養大学の加藤先生から研究データについての説明を受けたり、運動効果の実証実験の方法を教示いただいたりして研究を進めてきた。その成果を11月に高島町で行われた「高島オーガニックラボ」というイベントで発表し、また、担当教員がこのラボにおいて、本プロジェクトの教育的効果等についてプレゼンテーションを行い、また、パネルディスカッションのパネラーとして加藤教授、有機農家らと参加した。

「子ども食堂プロジェクト」

(NPO法人ゆあら、山形大学工学部、大学生と協働でのプロジェクト)

ゆあら子ども食堂代表竹部氏の指導の下、実際に生徒たち自身で子ども食堂を開設し、ソーシャルビジネスを学びつつ、子ども食堂自体が持つ課題や通ってくる子ども、家庭の課題を知り、持続可能で意義のある子ども食堂の在り方を探究する。

実際に竹部氏から子ども食堂をめぐる課題について講義をしていただき、また、山形大学客員准教授であり、株式会社シナプテック代表取締役の戸田達昭氏にソーシャルビジネスについてワークショップを通じた講義をしていただいて、理解を深めた。そのうえで8月の文化祭時に子ども食堂プレオープンし、食材の調達から広報、調理まで自分たちで行い、自信を得た。その後、3回ほどゆあら元気食堂でのフィールドワークを行い、12月には自分たちでクリスマス子ども食堂を開催した。

「多文化共生プロジェクト」

(山形大学工学部、米沢市役所、米沢国際交流協会、JICA東北と協働でのプロジェクト)

グローバルカフェを開設し、本校生徒が留学生、技能実習生との対話を繰り返しながら、一緒になって外国人が社会的弱者とならない住みやすい町作りを形にする。そのことを通して外国人もまちづくりの主体者として市民となっていく真の共生社会の在り方を探究する。また、対話を通して仲間としての絆を深め、外国人が孤立しないような仕掛けを作る。

米沢国際交流員のマーカス氏に出前講座を依頼し、彼が日本人居住者に行った災害時の外国人への情報提供に関するワークショップをしていただき、外国人との共生社会実現の意義を問い直した。そのうえで二か月に一度グローバルカフェを開き、外国人留学生と対話を行いながら、彼らの抱えている課題を理解した。彼らと共生社会の第一歩を踏み出すべく、文化祭でのワールドカフェを協働で企画し、開

催した。また、外国人を受け入れる側にも課題を抱えていることも知り、米沢市立病院や米沢国際交流協会にもインタビューを行い、現状を把握した。

② PPL (2 学年)

個人での課題研究に取り組む PPL であるが、昨年度、課題研究を経験した 3 年生をメンターにつけ、日常的に教員のみならず、3 年生から助言を受けながら進めた。また、ゼミ形式を取り入れたり、国語科と連携し、テーマに関する本のレポートとブックレビュー作成、およびディスカッションを教科で行うなどし、探究学習におけるリテラシー強化を図った。

また、ハワイ研修について、現地のコーディネーターと連絡を密にとり、全体的には SDG s をテーマとして貧困・格差や日系人の歴史、多文化共生社会、平和、技術革新などについてフィールドワークや施設訪問ができるようプログラムを組み、それぞれの課題研究に知見を持ち込めるようにし、実施した。

③ PAL (3 学年)

3 年生は昨年度取り組んだ課題研究について英語で論文を作成する傍ら、メンターとして 2 学年の指導、助言にあたった。

2) グローバル・キャンプ

山形大学の留学生との協働学習キャンプを 1 泊 2 日で山形市蔵王にて行った。フィリピン、マレーシア、中国、フィジー、ボリビアからの留学生と本校生に加え、新庄東高校、山形西高校からの参加者も迎え、英語によるプログラムを実施した。プログラムはプラスチックゴミ問題のワークショップ、世界の様々な“違い”特に教育をめぐる違いについて考えるワークショップ、SDG s ランキングワークショップなどであり、それぞれにおいて積極的な参加が見られた。

3) Edge-Next

山形大学国際事業化研究センターと連携協定を結び、文部科学省次世代アントレプレナー育成事業である「山形大学 EDGE-NEXT 人材育成プログラム」に参加して大学生や社会人向けの起業家教育を生徒と共に受講した。講義はオンラインでの受講を基本としたが、希望生徒は本校が参加しない講義についても山形大学に足を運び、講義を受けた。また、この一環として行われているグローバル・コミュニケーションズ (実践的英語コミュニケーションスキルプログラム) にも多くの生徒が参加した。

4) グローバル・サミット

探究学習やグローバル・キャンプ等における SDG s 理解の成果発信および学びの深化を目的に、台湾、高雄市でのグローバル・サミットを企画した。山形県観光物産協会との協働主催、山形県や山形県教育委員会、JICA 東北、台湾国際教育旅行連盟、高雄市、台湾教育局など多くの後援をいただきながら、台湾側から 7 校 8 チームの参加、本校生徒 12 名、新庄東高校 5 名の参加で進めていたが、コロナウィルスの影響により、本サミットの開催を断念せざるを得なかった。

5) 研究成果報告会・運営指導委員会

2 月に本校を会場にて研究成果報告会を実施し、成果を地域に発信した。鈴木憲和衆議院議員をはじめ、県議会議員や米沢市、高島町、川西町などの議員および役所職員、県内の企業役員、県内外の教員含め 50 名ほどの参観者にむけて成果を発信することができた。

報告会では、生徒の研究成果発表や模擬国連などを行い、それぞれについて、運営指導委員から講評をいただいた。また、会の終了後には運営指導委員会を行い、本事業について、また、次年度以降

の運営指導委員会の持ち方について協議を行った。

6) 教科横断型学習

教育内容充実課が計画を立て、教科横断型学習の研修として教員を他校への視察に派遣した。地域との協働による「食と健康」「子ども食堂」のフィールドワーク及び、グローバル α での学習内容に合わせ、家庭科や国語、英語の授業を実施した。また、校内研究授業において、国語科が「食と健康」との横断型授業を行った。

7) 海外交流アドバイザー及び地域協働学習実施支援員

海外交流アドバイザーがフィリピンの高校とメールや手紙等のコミュニケーションを密にとり、グローバル型の趣旨を踏まえた姉妹校提携を実現させた。また、越境体験と地域での外国人との人脈を活かし、「多文化共生」プロジェクトにおいて、生徒の学習活動への助言のほか、グローバルカフェの実施や国際交流員のワークショップ企画など、活動全般に支援を行った。

地域協働学習実施支援員は本事業全体のカリキュラムマネジメントについて、事業担当教員へ助言を行うほか、「食と健康」プロジェクトの講義やフィールドワークの計画・立案から農家やNGO法人との日程及び内容の調整等までプロジェクト全般をコーディネートした。さらに、次年度へ向けて町役場の担当者や新しい協力者を発掘し、本校担当教諭と引き合わせるなどしながら計画・立案を行っている。

8 目標の進捗状況、成果、評価

初年度としては多文化共生におけるグローバルカフェの4回実施及び市立病院での調査、食と健康における2回の講義と3回のフィールドワーク及び、米沢栄養大学での実証実験の実施、子ども食堂における3回の子ども食堂への参加と2回の本校生自身による開催など、地域と協働して実質的にプロジェクトを進めることができ、その成果も県内外で発表することができたことを一つの成果と考えている。さらには、グローバル α における模擬国連をはじめ、グローバル・キャンプも新庄東高等学校と開催することができ、本校の知見を新庄東高校に波及させることができた。

これらは当然それぞれのプロジェクトがコンソーシアムと協働できたからこそ実施できたものであり、その土台を形成することができたことを意味している。また、その過程において、次年度のコンソーシアムの在り方について課題を発見できたことも次年度の事業の発展に大きな意味を持つ。さらに、事業の進捗にあわせて、協力を申し出てくれる個人や団体も現れたり、また、新たな団体等とつながることができたりと、事業の発展が見込まれている。

2月に開催予定であった台湾でのグローバル・サミットについても、県内及び台湾側の協力団体と連携を図りながら順調に準備を進め、地元企業等が事業の趣旨に賛同し、協賛してくださったが、これも本事業の普及という点で一つの成果とみられる。残念ながらコロナウィルスの影響で開催を断念したが、次年度へ向けて運営方法や協力者との連携方法など知見を得られたことや、企業の協賛を得られたことは持続可能性という観点からも大きな成果である。

また、台湾の高校と姉妹校の締結式を行うことができ、それに伴う交流プログラムを実施することができた。交流を通してグローバル・シチズンシップについてその資質を伸ばすことができただけでなく、交流プログラムに有機農業の視察が入っており、学校プロジェクトについて相対的に考察する機会となり、生徒の非常によいモチベーションとなった。フィリピンの高校とも姉妹校提携の合意形成ができたことも大きな収穫である。

2月の研究成果報告会においても、県内のSDGsに関心のある企業役員や地域課題の解決に関心の高い県会議員及び市議会、町会議員、役所職員が参観し、本事業の趣旨と成果を発信することができた。報告会後の運営指導委員会において、本事業がローカルとグローバルのバランスがよく、学校プロジェ

クトをはじめとして多様な教育、活動機会を生徒に与え、実社会に必要な資質、技能を身につけさせていると事業全体としての質の高さを評価していただいた。報告会のアンケートからも参加者からの事業への理解と関心が高まった様子が見られた。

他方、教科横断型学習については先進的な学校を視察しながら、今年度のフィールドワークをもとに、次年度以降どのような授業が展開できるかイメージを作ることができた。しかし、今年度は各教科からの具体的な提案をまとめている状況であり、進捗が遅れが生じている。

生徒への意識調査から、本事業を通してグローバルなコンピテンシーが身についた、あるいは向上したという結果を読み取ることができた。その中で、SDGsと地域課題への関心、解決への意欲と自信、郷土愛など、多くの地域の方との関わりの中ではぐくまれたであろう項目について高いポイントが見られたことは特筆に値する。生徒の会話からも、地域に出て、人々と関わる中で、地域の多くの方々が彼ら自身の活動を肯定的にとらえ、客観的に高く評価する声かけをしてくださったことが活動のモチベーションと自己有用感の向上につながっていることが報告され、事業によって生徒の変容が促進されていることがよく理解できた。

一方で、本事業の目標と照合させてみると、地域人材を育成する高校としての活動指標として、外部コンテスト等への延べ参加者数が今年度の目標10に対して実数は13と生徒が自発的に活動成果の発信を行っている。また、本事業に関連する「みちのくイノベーションキャンプ」のような地域課題解決のための合宿に自発的に参加する生徒があったことから、本事業が生徒の地域貢献への意欲を高めていることが分かる。また、自主的な海外研修・留学へ参加した生徒の目標値8に対して実数4と姉妹校への短期留学などのチャンスが増えたにもかかわらず、参加者が昨年度と同数だったことは残念であるが、多くの生徒が2月のサミットへ自主的に参加を希望した。さらには研究報告会への一般参加者も目標の40に到達し、保護者の参加も含めると50の参加者があり、事業の進捗によって、地域の事業への理解と関心が高まり、生徒を地域人材として育てようという気運の高まりを感じた。地域人材を育成する地域としての活動指標として、地域人材が参画した延べ回数が目標値25に対して実数が35とあり、子ども食堂など本プログラムが地域に認知されるにしたがって、関心を持つ地域の人々が増加している。さらに、研究報告会の開催によって、自治体、議員の関心が高まった。地域との協働という視点において、地域の方々からの高い関心は大きな成果と言えよう。

<添付資料>目標設定シート

9 次年度以降の課題及び改善点

今年度、コンソーシアムと個別の会議はもちながら連携を図り、事業を展開してきたが、全コンソーシアム合同会議を行い、全体でビジョンと計画を共有し、事業の運営に当たっていく必要性を感じている。それがなされていなかったために、多様な教育活動は行っているものの、全体としては統一感に欠け、全体像がぼやけてしまっている。同時に事業の進捗によって新たな連携先との協働の必要性も生じている。従って、校内の研究開発部での再度ロジックモデルの作成を通して本事業に必要なコンソーシアムについて再検討し、また、そこで明確化されたビジョンをコンソーシアム全体会において共有するところから始める計画である。

さらに、事業の進捗に伴い、協力団体の増加や興味深いアイデアやプログラムの提案があり、また、他の取り組みの必要性が生じてしまう。それらを整理して、全体のカリキュラム・マネジメントをきちんと行わないと、中途半端なものになったり、教員はおろか、生徒も疲弊しきってしまい、教育効果は上がらないと感じている。そのあたりのマネジメントとアセスメントをどれだけ精緻にできるか課題である。

カリキュラムに関しては、姉妹校との交流プログラムの構築も課題である。今年度は偶然に本校での取組に還元できる内容が盛り込まれていたが、姉妹校と交渉を重ねながら新しいプログラムを構築し、グローバルな視点で考察できるように工夫が必要である。

生徒の探究活動において、質的向上にも課題を感じている。運営指導委員からも指摘されたことでもあり、コンピテンシーとリテラシーのバランスを考慮しながら改善すべきである。これについて、大学と連携した課題研究の在り方も現在は模索しているところであり、ビジョンを共有しながら大学の教員による定常的・定量的な課題研究指導体制を作り、研究を進めるノウハウを構築し、質的向上を図りたいと考えている。これについては高大連携の担当者を組織し、ゼミ形式での探究学習を押し進めながら大学側と連携を図っていく。ただし、運営指導委員から、生徒の取組内容について、中間報告なども含めて生徒に発表をさせ、それを動画に納めて運営指導委員と共有することで、物理的・時間的制限を超えて指導、助言ができることとアドバイスをいただき、ICTの利用、強化も含めて検討していく。運営指導委員としても、最後の研究報告会だけを見て評価するより、途中経過を見ることで、生徒の変容も含めてより多面的に評価することができるのと指摘を受けたため、早急に計画を進めたい。また、すでに近隣の大学の研究室とつながりを持っている部分もあり、連携強化を図っていく。現在は4月の初旬に運営指導委員会を持ち、次年度の活動計画を協議するよう企画している。また、学校プロジェクトに対する生徒の負担感と内発的動機付けに課題を感じる部分もあった。ただし、内発的動機付けについては、事業の趣旨、目的等について丁寧な説明、さらに町歩きのようなフィールドワークや地域の方との座談会のような、リアルに課題を感じられる仕掛けが必要だと考えている。一方で、先述のように地域に出て、地域の方々との関わりの中で解消されていくことが分かったため、フィールドワークの実施を時期、内容を再検討しながら解決したい。

次年度早急に解決しなければならない重要事項に教科横断型の学習の推進があげられる。本事業、特に「食と健康」プロジェクトが家庭科教員への刺激となり、家庭科として有機農業（食）と体作りについてコンソーシアムに講演を依頼するなど、校内での広がりが徐々に見られるようになったものの、プロジェクトと教科での学習を有機的に結びつけて、生徒に生きて働く知識と技能を身につけさせる部分に課題を抱えている。教科横断型学習の必要性とその効果について関心が高い教員が個人的に取り組んでいる部分があるため、その知見を校内に発信しつつ、教育内容充実課に担当部署を置き、教科ごとに目標を持って研究にあたらせながら進めていく。活動指標として校内での研究授業を2回程度行い、1回は公開授業としたい。

【担当者】

担当課	研究開発推進部	T E L	0238-22-0091
氏 名	鈴木 精	F A X	0238-22-0092
職 名	推進委員長	e-mail	sei@tw.kunori-h.ed.jp